

令和7年度 第1回 横浜美術館指定管理者選定評価委員会 会議録

1 日 時 令和7年8月20日（水） 13時30分から15時20分まで

2 場 所 横浜美術館 円形フォーラム

3 出席者 太下 義之 委員、垣内 恵美子 委員、笠原 美智子 委員、丸山 宏 委員、  
吉富 多美 委員

4 傍聴者 なし

5 議事内容

議 題	<p>1 定足数の確認</p> <p>2 委員会の公開・非公開</p> <p>3 令和6年度業務評価</p> <p>(1) 指定管理者業務報告及び自己評価</p> <p>(2) 行政評価</p> <p>(3) 委員による評価（指定管理者へのヒアリング、評価等の説明）</p>
議事・ 委員意見等	<p>1 定足数の確認 委員数5名のうち5名の出席により定数を充足しており、会議の成立を確認した。</p> <p>2 本委員会の公開・非公開について 横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条及び横浜美術館指定管理者選定評価委員会運営要綱第9条に基づき、公開とした。</p> <p>3 議題：令和6年度業務評価</p> <p>(1) 指定管理者業務報告及び自己評価 指定管理者から、令和6年度の実績及び自己評価についての説明があった。</p> <p>(2) 行政評価 業務評価表に基づき、事務局から行政評価の要点について説明があった。</p> <p>(3) 委員による評価 委員から指定管理者に対する評価内容の説明及び質問を行った。</p> <p>&lt;主な意見及び質疑内容&gt; (以下「・」は委員、「→」は指定管理者、「⇒」は事務局)</p> <p>・データベースの検索について、分野やジャンルで検索してそれに該当する作品を表示させることは出来るのか。 →カテゴリーや分野ごとの表示、自由ワードでの検索が可能なシステム。「学芸員の解説が読める作品」といった項目で検索して作品を選ぶようなこともできる。</p>

	<p>・収蔵基準の方向性について、内部での明確化が必要では。デジタル・コンセプチュアルアートの保存や収集について検討はされているか。</p> <p>→横浜トリエンナーレで最先端の作品を取り扱っていることもあり、今後恒常的に作品を収集していけるようであれば、個別の作品に即して収集条件を検討していきたい。</p> <p>⇒大規模改修で収蔵庫は約40%増となったが、今後収集物が増えていく一方である中で、どのような収集・収蔵方法が適切であるのかはより積極的に議論していきたい。</p> <p>→収集基準の明確化という点については、数年前に学芸内部で議論をした。ただしそれは収集の厳格化ではなく、足りない要素を補うためのもの。収蔵庫問題については何十年ものスパンにわたる議論になるかとは思いますが、市と協働して考えていきたい。</p> <p>・「文化基金の継続的積立と安定的運用に関する市の取組に積極的に関与し」とあるのは具体的にどのようなことか。</p> <p>→市のネーミングライツの取り組みなどに積極的に意見を寄せた。</p> <p>・定量評価の指標として新規来館者数の総来館者数に占める割合20%が挙げられているが、この数字には理由があるのか。参考指標として割合を把握していけばいいのではないか。</p> <p>→過去の実績を基に毎年増加していくことを目指して設定している。</p> <p>⇒公共施設として多くの市民に訪れてほしいという目標がある中で、今まで来たことのない市民にも足を運んでももらいたい、その取り組みを進めていくというところで、一定の指標が設定されたものと認識している。</p> <p>・美術館に足を運ぶことがないという人は多い。横浜370万人の市民が一人でも多く美術館に興味を持ってもらえるような仕掛けもたまには必要であると思う。</p> <p>→新しい人がどれだけ来ているのかということは割合として把握しようとしている。新規の取り組みをすると、ニーズはあったのに美術館に来られなかった層が発掘できることがあるので、そこでなぜ今まで来られなかったのかという理由を把握して対策を立てることで課題を解決していくことが重要と思っている。</p> <p>新しい人に来てもらうために、新しい分野・ジャンルに取り組むことを2023年からの10年の目標に掲げている。佐藤展のようにたくさんの方に足を運んでいただけると、周辺の商業施設からも感謝の声が寄せられることも事実なので、にぎわいや経済効果の創出もある程度視野に入れながら地域が盛り上がっていくようにするのがこの施設の役割でないかと思っている。</p> <p>・文化観光拠点計画にある100万人という数字の設定根拠と、首都圏・県内での認知度が下がっているという件について市内の認知度はどの程度なのかという点について伺いたい。</p> <p>⇒2024年の調査では、横浜市民の認知度は77.4%である。100万人という来館者目標は明確な根拠があるわけではないが、過去最も美術館で来館者が多かった年は100万人を超えていたので、リニューアル後は無料ゾーンの開放などもあり来場者が見込めるのではないかとということで、少し高め目標を設定した。</p>
--	---

	<p><b>【評価する点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・199点という多くの寄贈を受けたこと、トリエンナーレ出展作品の購入も実施したことを評価する。</li> <li>・空間設備やコレクションのアーカイブ化などの基盤整備が進み、リニューアル後の滑り出しが非常に良好なものとなった。また、多様な教育普及プログラムやアウトリーチも実施され、誰にでもひらかれた美術館の実現を目指した取り組みが行われたことを評価する。</li> <li>・コレクションのウェブサイト公開は、様々な事情で美術館に来られない人がコレクションに触れる機会になっており、さらに多言語対応によって国内に限らず、多くの人が見ることができる、とても良い取り組みである。</li> <li>・出展作品の3分の1が日本で初めて紹介された「横浜トリエンナーレ」、学びの多い「おかえり、ヨコハマ展」、幅広い層からの注目を集めた「佐藤雅彦展」、海外美術館との連携によって実施される「日韓現代美術展」と、良質かつ独自性の高い展覧会の企画・開催が行われた。</li> <li>・「子どもと子育て世代」をターゲットに設定して特色を打ち出している点を特に高く評価する。経験やつながりの貧困でつらい思いをしている子どもたちにとって、文化的な経験を得られる機会はとても重要であり、子育て世代の安心にもつながることから、より強く推進していったほしい。</li> <li>・文化庁やその他のステークホルダーと連携して、文化観光拠点計画を着実に推進した点を評価する。</li> <li>・専門人材の人数が増やされたことを評価する。今後は紀要・学会誌への投稿など研究者としての活動を館が支援していくことでその専門性の向上にも結び付けてほしい。</li> <li>・常勤で職員を採用して確保している点は非常に高く評価できる。一方で美術図書室の司書については非常勤が多いため、こちらについて見直しを進めてほしい。</li> </ul> <p><b>【更なる取組を期待する点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・業務報告の記述が抽象的であったり、完了報告内容がチェックシートで事足りるようなものであったりするところがある。</li> <li>・トリエンナーレは特に海外からの来館者が多く関心を集めていたのではないかとと思われるので、今後の開催にそうした海外来館者のデータを生かしてもらいたい。</li> <li>・定量評価はPDCAを回していくための参考指標として重要な数字だが、必ずしも数の達成を目標にすればよいというものではない。</li> </ul>
--	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校や放課後キッズクラブを通した子どもたちへのアウトリーチに加え、不登校の子どもたちを応援するためのプロジェクトを期待する。対象となる子どもの数はかなり多い。美術館だけの力で行うのはコスト的にも難しいだろうから、企業・団体とのマッチングなど、支援してくれるパートナーを探すことにも取り組んでほしい。</li> <li>・人々の価値観が多様化している時代に、美術館に全く関心を持たない人たちを呼び込もうというのは無理な話なので、興味はあるけれど足を運ぶことがない人たちを取り込んだり、リピーターを増やしたりといった形でポテンシャルを高めていってほしい。新しい需要の掘り起こし、より多くの市民の体験の場として開かれたミュージアムとしての発展に期待する。</li> <li>・市民目線の評価が高いものであれば、他地域からの来場者が増えたり、企業や団体からの支援に繋がったりしていくものと思われる。大きな規模の予算を使って動いている施設なので、それに見合う価値が還元されているという実感を市民が抱けるような形になるとよい。</li> <li>・首都圏認知率が長期休館前と比べて大きく低下している。これについてはリカバリー策の検討など、留意をしていかななくてはならない。</li> </ul> <p>5 まとめ</p> <p>本日の委員会で確認した内容を踏まえ、各委員は評価シートを改めて清書し、事務局で調整の上、委員会の最終評価内容としてまとめることとした。</p>
--	---